東洋史研究
第十九巻 第一號 昭和三十五年七月發行

中國古代の麻織物生産

佐藤武敏

一 まえがき

中國における衣料生産の歴史をふり返つてみると、高級衣料は古代から近代迄絹織物が主であるのに對し、一般の衣料は古くは麻や葛などが用いられたが、元・明以後綿織物の普及によつて麻織物はしだいに衰微したようである。

中國の織物史の研究は、これ迄絹織物と綿織物とにもつぱら力がそそがれ、したがつてこれらに關する研究は、豊かな成果をあげてきた。これにひきかえ、麻織物に關する研究はきわめて乏しく、とりわけ經濟史的な觀點から取扱つた研究はほとんどなかつたようである。それには資料の不足ということもあるが、さらにまた次のような見解が支配的であつたことによるとも考えられる。つまり中國古代の麻織物の生産は、その生産技術や生産形態などにおいてあまり變化がなかつた、という見解である。たとえば李劍農は、先秦兩漢時代の布帛の生産は自給自足であつたとしている[1]し、また侯外廬によると、古代の布の生産は農業と結合した形、つまり農村副業の形で行われ、生産の主な擔い手は農村婦女子であつたとしている[2]。

しかしこれらの中國古代の織布業を自給自足と規定する見解には多少の異說がある。たとえば近年楊寬は、戰國時代家內工業で生產された布帛は商品の性質をおびていた、と考えている。ただし當時はまだ〝小部分〟にすぎなかつたとして[3]いる。

そこで私は、中國古代の麻織物生產に關する考察を進めるにあたつて、とりわけ次のような諸問題に焦點をおくことにしたい。

第一に中國古代の麻織物生產において商品生產（嚴密にいえば單純商品生產）が行われたかどうか、行われたとすればどの程度であつたか、ということ。

次に中國古代において商品生產がおこつたとしたなら、どのようにして可能となつたか、生產技術や生產形態の面で何らかの變化があつたかどうか、ということ。

最後に戰國時代から漢代にかけて麻織物生產はどのように發展していくか、またその性格をどのように考うべきか、ということなどである。

しかしこれらの諸問題に入る前に、一應戰國時代以前の麻織物生產の情況を明らかにすることから出發しよう。

註

(1) 李劍農「先秦兩漢經濟史稿」一七五—一七六ページ。

(2) 侯外廬「論中國封建制的形成及其法典化」（「中國古代史分期問題討論集」所收）五三九—五四五ページ。

(3) 楊寬「戰國史」三四ページ。

二　殷周時代の麻織物生產

麻織物の起源　中國における麻織物の起源は、今日世界の他の諸地域と同樣新石器時代迄溯ることができる。ただ中國の場合當時の麻布そのものはまだ發見されておらず、次のような間接的な資料によつて推定されているだけである。その一つ

は、土器の表面に殘つている織物文である。河南省澠池縣仰韶村や同省安陽後岡出土器面には麻織物のあとが見られ、とくに仰韶のものについては、アンダーソンは苧麻が使用された、と推定している。[1] また近年江南出土の印紋陶にも麻織物のあとが見られるとされる。

もう一つは、紡錘車の出土である。これについては本當に紡糸に使用されたかどうか疑問もあるが、アンダーソン[2]やモンテル[3]の調査によると、先史時代の紡錘車は、中國で現在なお使用されている紡錘車と少しも違わないとのべており、「輝縣發掘報告」も殷代の紡錘車について同様のことをのべている。ただし譚旦冏が四川省で調査した結果によると、今日麻糸を紡ぐのはまつたく手仕事で、道具は用いられないようである。[4] またホンメルは糸車を使用している例を報告している。[5] 先史時代の麻糸の紡糸は、糸車の使用は考えられないが、紡錘車を用いる方法、手による方法などが行われていたと思われる。

先史時代の紡錘車の出土は、かなり廣い分布を示しており、西は甘肅、東は熱河、南は浙江迄となつている。また紡錘車には石製と陶製とがあり、陶製のものには彩文のあるのも見える。[6] 紡錘車の分布から麻織物が各地で生産されたことが推定されるが、當時の麻織物生産の詳しい情況は不明である。

殷周時代の生産形態　殷代に入ると、麻織物生産の情況がいくらか明らかになる。甲骨文には麻や麻織物關係の記事は見えないが、新石器時代と同様麻織物生産を推定させる間接的な資料が殘つている。その一つは、土器や銅器に附着している織物文である。張龍炎は「出土した土器のなかに繩紋印、布紋印があることから殷代麻があつたことが推知される」[7]といい、李濟は「殷墟の西北地斜坑と中部墓葬一八・二より出土した戈形銅器の上にきわめて顯著な布紋が印せられていることが認められる」[8]としており、岩間德也氏も同氏が所藏していた殷墟出土とおぼしき銅戈の上に布紋が見られ、これは麻布であろうと推定している。[9] さらにまた一九五五年鄭州から出土した殷代の銅盆にも布のあとが發見されている。[10]

次に新石器時代と同様の紡錘車が殷墟、鄭州、輝縣琉璃閣などの諸遺蹟から發見されている。

さて殷代から周代にかけての麻織物の生産形態は、次の二つに分けることができると思われる。それは(1)王室直營工作場の生産と(2)村落共同體の生産である。これらについてさらに詳しく考えてみよう。

(1)王室直營工作場の生産　殷墟の遺蹟の一つに通常復穴と呼ばれるものがある。これは穴居のあとで、形式には圓形、楕圓形、方形、長方形などがあり、直徑は約二―四メートル、深さは通常二メートル位。當時坑の上に圍いをし、木で屋根をつくり、茅茨などで覆つたもののようである。董作賓は「この種の復穴は、殷代百工臣僕の居住したところ、或は工作場か貯藏所の役目をなしたものであろう」[11]と推定している。そしてこれらの復穴から紡錘車なども出土している。おそらくこうした復穴で紡糸や織布なども行われたのではないか、と考えられる。さらにこれらの仕事を擔當したのは、おもに復穴に居住していた殷王室の隷屬民たちであつたと思われる。

(2)村落共同體の生産　これについては資料が乏しく、あまり明らかではないが、私は「漢書」食貨志上の次の文はかなり古いつたえにもとづくものではないかと考える。

冬民既入、婦人同巷相從夜績、女工一月得四十五日、必相從者、所以省費燎火、同功拙而合習俗也

この資料によると、①紡績の仕事は、冬期つまり農閑期の夜行われること、②生産の直接擔當者は、農村婦女子であること、③婦女子の勞働期間は「一月にして四十五日」であること、④村落内に共同作業所があり、その作業所で共同作業が行われること、⑤共同作業が行われる意味は、一つは燈火燃料の節約であり、もう一つは同一技術で同一製品がつくられるという點にあることなどがわかる。

このうち③の婦女子の勞働期間「一月にして四十五日」については、服虔は「一月の中または夜半十五日たるを得、すべて四十五日なり」と解している。つまり（1日）30日＋（夜半）15日＝45日ということになる。郭沫若は服虔の説を敷衍して當時婦女子の勞働さえ激しく、一日十八時間も働かなければならなかつた、としている[12]。なおこれは單に婦女子の勞働時間が長かつたことを意味するだけでなく、麻の手紡ぎ作業がかなりの勞苦を伴う仕事であることをも意味するもの

であろう。後世の文獻であるが、「天工開物」卷上衣服夏服によると、麻の纖維を細く裂いて續みつなぐのに非常な手間がかかり、一日の働きでやつと三―五銖の重さの糸を得るにすぎない[13]、とされている。

ところで村落共同體で生産された麻布は、一旦村落共同體もしくはその村落共同體が領主によつて支配されている場合は領主に歸屬し、そこから再び村民に分配されたようである。「詩經」豳風七月の詩に、

七月流火、九月授衣、一之日觱發、二之日栗烈、無衣無褐、何以卒歲

と見える。この詩の他の箇所によると、これは公子や田畯によつて支配されている農村のことであるが、この農村では九月に公子より冬の衣服を與えられたようである。おそらくそれは村落の共同作業所で製作されたものと思われる。

製造技術　この時期の麻織物の製造技術については、斷片的なことしか分らないが、まず莖から纖維を抽出する迄の工程として、麻を水に浸すことが行われた。「詩經」陳風東門之池に、

東門之池、可以漚麻、彼美淑姬、可與晤歌、東門之池、可以漚紵

と見える。ここでいう麻とは大麻で、紵とはいちびつまり China jute であろう[14]。

次に紡糸は、新石器時代と同様紡錘車が使用されたこともあつたようである。當時の紡錘車には石製と陶製とがあつた。

織布技術は、今日殘つている當時の織布の痕迹から推測するほかない。前にあげた岩間德也氏舊藏の殷墟出土とおぼしき銅戈の上の布紋について、同氏の調査によると、その布紋は三・三センチの幅で、帶狀をなし、一センチ平方に經綫（たていと）四八本、緯綫（よこいと）一八本で、その織目が至つて粗大なことから、周代の三〇升の麻布（「儀禮」士冠禮爵弁服――古は八〇綫をもつて一升としたから、三〇升は幅廣二尺二寸の經綫二、四〇〇本）は周尺七寸二分（營造尺）說をとつて算出すれば、一センチの經綫四七・三四本となつて頗る近似せること、さらに布紋が鮮明に印象されたのは、その纖維が頗る强靱で、水濕に對し耐久力に富み、相當長期間腐朽しなかつたのにまつこと、また布紋の經、緯綫をなす纖維が分離してかつ縒

のかかつていることが看取されることなどの諸點から麻布であろう、と推定[15]された。しかし氏の調査で織目が粗大だというのは絹織物に比較してのことであつて、（因にシルバンの調査によると、殷墟出土とつたえられる青銅製鉞に附着した絹織物の斷片は一センチ平方にタテ糸七二本、ヨコ糸一七本となつている[16]）麻織物としてはきわめて精密な方である。後に麻織物の種類を說明する際詳述するが、三〇升布は麻織物では最も精密なものである。ただ殷代から何升布という種類分けが行われていたかどうか私は疑問に思つている。織物の密度の精粗は、織機の發達と必ずしも密接な關係はないようで、わが國の場合いざり機の方が高機より精密な密度のものが織れるといわれている。しかしそれには非常な勞力と多くの時間とを必要とする。殷代の機織技術は、それ程高くはなかつたようで、岩間氏がその痕迹を發見された精密な麻織物は、おそらく殷王室の隷屬民たちにより非常な勞力と多くの時間をかけて製作されたものであろう。これに對して一般農村の婦女子によつて副業的に生産された製品は、遙かに低級で粗末なものであつたにちがいない。

主地産　麻織物の産地は、當時衣料を自給自足するのが建前だつたとすると、かなり廣い地域にわたつて製作が行われたと考えられるが、麻を産するに適した地方ではより盛んに麻織物が生産されたであろう。文獻につたえられる麻もしくは麻織物の産地を見てみると、「詩經」齊風南山に、

藝麻如之何、衡從其畝

とうたわれている。齊は山東省臨淄縣地方である。次に同書王風丘中有麻に、

丘中有麻、彼留子嗟、彼留子嗟、將其來施施

と見える。馬瑞辰の「毛詩傳箋通釋」によると、留は大夫の氏で、劉と通用し、春秋の劉子の邑で、「漢書」地理志では河南郡緱氏縣あたりとされる。また前に引用した陳風の陳の都宛丘は河南省淮陽縣にあつたといわれている。次に豳風七月にも麻や麻織物のことが見えるが、豳は今日の陝西省邠州とされる。

「詩經」以外では、製作年代について問題があるが、「書經」禹貢篇に、

青州……厥貢鹽絺、海物惟錯、岱畎絲枲

豫州……厥貢漆枲絺紵

と見える。青州は山東地方で、この地方の特産物の一つに枲がある。枲は大麻のうちオアサにあたる。豫州は河南地方で、この地方の特産物の一つが紵である。紵は「詩經」陳風東門之池の場合と同様いちびを指すと思われる。

要するに「詩經」や「書經」によると、戰國時代以前の麻の主産地は、山東、河南、陝西などで、そのうち河南は大麻といちび、他は大麻となつている。そして時代が下るにつれてこうした自然的條件に惠まれた特産地では、いくらか餘剰生産が行われるようになつた、と考えられる。

それは一つは、「書經」禹貢にも見えるように特産地から餘剰の麻が貢として出されているのである。

もう一つは、「詩經」衞風氓の詩に、「氓之蚩蚩、抱布貿絲」と見える。この布については、布錢の意味に解する説もあるが、氓を本地の民でなく、他所から入り込んでくる民とし、それが麻布をもつて衞のあたりの女の仕事としている生糸と交換にくる、と解する説[17]をとりたい。とすると、餘剰の麻布が物々交換の對象となつたようである。

註

(1) アンダーソン著三森定男譯「支那遠古の文化」三七―三八ページ。

(2) アンダーソン著松崎壽和譯「黄土地帶」三〇〇ページ。

(3) G. Montell : Spinning tools and spinning method (Sylwan Vivi : Woolen textiles of the Lou-lan people, 1941. Appendix)

(4) 譚旦冏編著「中華民間工藝圖説」一、織夏布、壹、績麻參照。

(5) R. P. Hommel : China at work, 1937.

(6) 石龍過江水庫文物工作隊「湖北京山天門考古發掘簡報」(「考古通訊」一九五六年三號)。

(7) 張龍炎「殷史蠡測」(「金陵學報」創刊號一九三一年五月)。

(8) 李濟「俯身葬」(「安陽發掘報告」第三冊　四六六ページ)。
(9) 岩間德也「殷虛出土戈形兵器に現はれたる鋼鍔の布紋に就いて」(「滿洲學報」第四、一九三六年、一―七ページ)。
(10) 許順湛編著「燦爛的鄭州商代文化」一八ページ。
(11) 董作賓「甲骨學五十年」四〇ページ。
(12) 郭沫若「奴隷制時代」一六ページ。なお郭氏も本文に引いた「漢書」食貨志の文は必ずもとづくところがあつた、と考えている。
(13) 一銖を〇、六七グラムとして計算すると、三―五銖は、二、〇一―三、三五グラムである。なおわが國の新潟縣小千谷市では、麻糸をつくるのに熟練した人で一日五匁(一八、七五グラム)、普通は三―四匁(一一、二五―一五グラム)とされている。麻の手紡ぎがいかに勞苦を要するものであるかがわかる。
(14) 紵の古いものを苧麻とする説といちびとする説とがあるが、天野元之助教授稿「中國之麻考」にしたがつていちび説をとつた。
(15) 岩間氏前掲論文參照。
(16) Vivi Sylwan : Silk from the Yin Dynasty (BMFEA No. 9, 1937)
(17) 目加田誠「詩經」四八ページ。

三　戰國時代の商品生産

戰國時代の餘剩生産　周末、麻の特産地などで麻もしくは麻織物の餘剩生産が發生したことは前節で見た通りであるが、戰國時代に入り餘剩生産の量はさらに增加した、と考えられる。

戰國時代の餘剩生産物は、まず貢租として國家の手に收められた。「韓非子」外儲説右上に晏子のことばとして、

夫田成氏甚得齊民、其於民也、……終歲布帛取二制焉、餘以衣士

と見える。鄭玄は、一制を一丈八尺の長さとしている。つまり田成氏は、民から徵收した布帛は三丈六尺だけを手許に殘し、他は士に與えたというのである。また「孟子」盡心下篇に、孟子のことばとして、

有布縷之征粟米之征力役之征、君子用其一、緩其二、用其二而民有殍、用其三而父子離

と見える。趙岐の注では、征は賦で、國に軍旅のことがあつた場合に徵發されるもので、布縷の征の布は、軍卒の衣をつくるもの、縷は鎧甲を縫う糸とされる。しかしこの文は必ずしも趙岐のように非常の場合のことと解する必要はなく、一般的な税の種類をのべたものと解して差支ないと思われる。ただそれは孟子の税に對する見解であつて、事實布縷の征が行われたかどうか疑問もあるが、私は毎年恒常的に行われたものではないにしても行われることがあつた、と考える。

次に餘剰の麻織物は、商品として市場に流通するようになつた、と考えられる。「孟子」滕文公上篇によると、農家派の許行たちが穀物と冠の絹、食器、農具などとを物々交換したことがつたえられており、これにより當時の農民はおもに物々交換で衣料や農具を獲得したと説く人たちもいる。おそらく貨幣の浸透しない地域の農民は、物々交換によるほかなかつたが、しかし「孟子」のこのつたえは、農家派という特殊な主張にもとづいた生活を行つている人たちのことである。「孟子」滕文公上篇には、別に次のような陳相のことばも見えている。

從許子之道、則市賈不貳、國中無僞、雖使五尺之童適市、莫之或欺、布帛長短同、則賈相若、麻縷絲絮輕重同、則賈相若、五穀多寡同、則賈相若、屨大小同、則賈相若

これによると、市場で布帛、麻縷絲絮、五穀、屨などが商品として賣買されていたこと、またそれらは、それぞれ價格が附され、おそらく現金で取引が行われたことなどがわかる。貨幣の浸透している地域の農民たちは、現金をもつて市場で衣料などを購入したと思われる。このことを明確につたえているのは、「漢書」食貨志上に見える李悝の説である。李悝は盡地力の説、平糴法を説く前に、當時の農家經濟の分析を行つているが、それによると、

今一夫挾五口、治田百畮、歲收畮一石半、爲粟百五十石、除十一之税十五石、餘百三十五石、食人月一石半、五人終歲爲粟九十石、餘有四十五石、石三十爲錢千三百五十、除社閭嘗新春秋之祠、用錢三百、餘千五十、衣人率用錢三百、五人終歲用千五百、不足四百五十、不幸疾病死喪之費、及上賦斂又未與此

と見え、戰國時代の初期魏の文侯のころ魏の地方の農家では、一人一年の衣料費が三〇〇錢、五人家族では、一、五〇〇

錢となり、現金支出中最大の費目となつている。しかもここに見える農家は決して特殊な農家ではなく、當時の標準的な農家である。戰國初期このように衣料を購入しなければならない農家があらわれていることは、その反面麻織物などの餘剰生産を行い、しかもそれを商品として販賣する生産者がかなりあらわれていることを意味する、と考えられる。

それではこうした商品生産は一體どのようにして可能となつたであろうか。當時の麻織物の生産形態と生産技術の兩面から檢討してみよう。

生産形態

「左傳」成公二年に楚が魯の地を侵したので、魯では楚に執斲、執鍼、織紝全部で一〇〇人をおくつたとつたえられる。杜預の注では、執斲は匠人、執鍼は女工、織紝は繪布を織るもの、となつている。織紝は「禮記」內則によると、「執麻枲、治絲繭、織紝組紃」と見え、麻織物や絹織物をつくる女工のようである。これらの工人たちは、おそらく魯國の官營工作場に隷屬していたものであろう。春秋時代から戰國時代にかけての官營工作場において、やはり麻織物の生産が行われたと思われるが、しかし戰國時代に入ると、官營工作場の生産はそれ程盛んに行われなくなつたのではなかつたろうか。それは農村の生産が增加したことと國家は農村から貢租として徵收することになつたためと思われる。

戰國時代の農村における麻織物生産の直接の擔い手は、殷周時代と同樣農村の婦女子であつた。男子が耕し、女子が織るという說が、「墨子」非樂上、非命下、辭過篇、「呂氏春秋」士容論上農篇、「周禮」考工記などに見える。ただ婦女子の紡織に從事する期間については、「呂氏春秋」士容論上農篇には、

是以春秋冬夏、皆有麻枲絲繭之功、以力婦敎也、是故丈夫不織而衣、婦人不耕而食

と見え、四季を通じて行われることになつている。或は戰國時代も末期になるにつれ、一部農家では四季を通じて行うようになつたのではなかろうか。

さらに生産形態の變化で重要なことは、戰國時代村落共同體が或る程度分解し、農家の經濟がそれぞれ獨立するようになつた、ということである。李悝が當時の標準的農家の經濟を數理的に分析しているということは、つまり當時農家の經

濟がそれぞれ獨立するにいたつたことを意味する。農家がそれぞれ獨立した結果、麻布の生產は、從來のように共同作業所で共同作業の形で行われるのでなく、各農家それぞれにおいて行われるようになつた。このことが各農家の勞働意欲を促進させた、と推測される。

なおまた共同體の或る程度の分解により、農家間の勞働力に相違が生じたようである。當時の文獻には、農家の社會的階層の相違により家族員數が異なることが屢々見えている。「孟子」萬章下篇には上層農家が九—八人、中層農家が七—六人、下層農家が五人と見え、「禮記」王制には、上農九人、その次は八人、その次は七人、その次は六人、下農夫は五人と見え、「呂氏春秋」士容論上農篇には上田夫九人、下田夫五人と見え、「周禮」地官小司徒には、上地の家七人、中地の家六人、下地の家五人、と見え、「管子」揆度篇には、上農五人、中農四人、下農三人と見えている。富裕な農家は、いずれも中乃至下程度の農家にくらべてその家族の員數が多いことになつている。そのことは、富裕な農家ほど勞働力に惠まれていた、と考えざるを得ない。これは富裕な農家が單に農業勞働力に惠まれていただけでなく、工業勞働力にも惠まれていたことを意味する。麻の特產地ではこうした工業勞働力は、當然麻織物の生產に向けられ、餘剩生產をも行うようになつた、と考えられる。

「管子」禁藏篇に、

夫民之所生、衣與食也、食之所生、水與土也、所以富民有要、食民有率、率三十畝而足於卒歲、歲兼美惡、畝取一石、則人有三十石、果蓏素食當十石、糠粃六畜當十石、則人有五十石、布帛麻糸旁入奇利、未在共中也

と見え、各種の副業が農家を富裕ならしめることが說かれているが、布帛麻糸の生產も旁入の奇利とされている。

製造技術　次に當時の麻織物の製造技術を見てみると、製線工程や紡績工程迄は、あまり變化がなかつたようである。出土の戰國時代の紡錘車は、前代と變つていない。織布技術については麻織物の場合明らかでないが、太田英藏氏は、絹織物を中心に古代中國の機法の變遷を、①原始機（無機臺貫刀杼機）、②曾母投杼圖機（有機臺貫刀杼機）、③滕縣畫象圖

機（古式布機）、（管大杼機）、④絹機（筬梭機）としている。[1] そして先秦時代は貫刀杼機で、最初は無機臺、後に有機臺に進んだのであろうという。或は麻織物の場合もはじめは無機臺で、戰國時代に有機臺が廣まつたのではなかろうか。因に太田氏の計算によると、原始機の機織作業動作數は、合計一八であるのに對し、曾母投杼機は一五であるというから、機法技術の改革は、麻織物の生産量の增加にいくらか影響を及ぼした、と推定される。

麻織物の規格　商品生産の發展とともに麻織物の規格が一定し、織物の種類が增加した。

まず織物の規格が一定したことについては、「韓非子」外儲說右上に、

吳起衞左氏中人也、使其妻織組、而幅狹於度、吳子使更之、其妻曰、諾、及成復度之、果不中度、吳子大怒、其妻對曰、吾始經之、而不可更也、吳子出之、……

と見え、組に一定の度があつたことがわかる。織物については、「禮記」王制に、

布帛精麤不中數、幅廣狹不中量、不粥於市、

とされ、布帛の幅が規格をはずれているものは、市場で賣買することが禁ぜられた。

そして織物の幅と長さについては、「漢書」食貨志下に、

太公爲周立九府圜法、……布帛廣二尺二寸爲幅、長四丈爲匹

と見える。この文では、布帛の幅は二尺二寸となつている。戰國時代の一尺が各國同じであつたかどうか問題であるが、たとえば楊寬の研究によると、秦の商鞅量から計算した秦の一尺は二三、〇八八六四センチであるという。[2] ただしこの文では、齊の太公望呂尚が制定したことになつている。果して太公望呂尚時代から右のような規格があつたかどうか疑わしいが、齊國は古くから織物業の中心地であるから、まず齊國あたりから二尺二寸という布帛の規格が定まり、それがしだいに各國に波及してゆき、秦漢時代には全國的に用いられるようになつたのではなかろうか。

それでは次になぜ二尺二寸が布帛の幅の規格とされるにいたつたか。はつきりしたことは分らないが、一つの假說をの

べると、織物の幅はわれわれの衣服の袖巾と縫代から生じ、長さは身頃と衿と衽との和によつて生ずる。つまり或る時代の織物の巾と長さは、衣服によつて決定されるといわれている。[3] そこで織物の巾を考える前に衣服の袖巾と縫代とを考えてみなければならない。尚秉和は、「禮記」深衣、玉藻を資料として、袖は肩から肘迄の褄(みころ)二尺二寸につづけてその先につけ二尺二寸としている。[4] おそらくこれから織物の巾が決まつたのではなかろうか。

麻織物の種類　次に麻織物の種類であるが、中國古代の麻織物はすべて平織で、その種類は織り方の精粗によつて分けられるだけである。

「儀禮」喪服によると、麻布は大功と小功とに分たれ、大功は七・八・九升布、小功は一〇・一一・一二升布となつている。このほか粗いのに緦と呼ばれる麻布があり、これは一五升の半分とされる。細いのでは「儀禮」士冠禮の疏によると、皮弁の服（朝服）は一五升布、冕は三〇升布となつている。

こうした升による麻布の分類が最も早く見えるのは、「國語」魯語上である。それには七升布が見え、これは妾が着る粗末な衣に用いたとされる。私は春秋時代から戰國時代にかけて、麻布の種類が増し、升によつて分類されるようになつたのではないか、と考える。一升は「國語」韋昭の注によると、「八十縷爲升」と見えているように八十本のタテ糸を意味する。したがつて七升とは、五六〇本の糸で、これが二尺二寸の幅をなしているということである。

今日戰國時代の麻布の實物として殘つているのに湖南省長沙出土のものがある。「長沙發掘報告」六四ページによると、長沙遺蹟の四〇六號墓から麻織物の斷片が出土したことがつたえられ、中央人民政府紡織工業部の鑑定の結果は、次の通りになつている。

……所附戰國墓的織物殘片二小片、經用顯微鏡鑒定得下列結果

1、此織物原料幷非蠶糸構成、取織維物中經紗中之單根織維以四〇〇倍顯微鏡觀測、可以看出織維雖曾被細菌侵蝕（此乃年久月深應有的現象）、幷在外觀上仍可看出其爲苧麻織維

2、此織物的構成爲平紋組織、其經緯密度如下、經紗每一〇公分二八〇根、緯紗每一〇公分二四〇根、與現在棉布（龍頭細布每一〇公分經二五四緯二四八）比較要緊密三、四六％

3、由此可見三千年前、我國卽有麻織物、由其織物之精細而論、可以知道我國古代紡織技術之高起、以上系初步意見、今后如過有專問研究紡織歷史時擬再作進一步的研究

これによると、長沙出土の麻布殘片は苧麻纖維であること、織り方は平織、その經緯の密度は一〇センチにタテ糸二八〇本、ヨコ糸二四〇本であり、現在の棉布たとえば龍頭細布より緊密であることが明らかにされている。

長沙出土の麻布を升にあてはめると、一〇センチに二八〇本とすれば、幅二尺二寸（一尺二三センチ説をとる）には四一六・八本で、八〇本を一升とすると、一四一六・八本は一七・七一となり、大體一八升布と考えられる。麻布としては上等な品に屬する。一體この麻布殘片が發見された長沙の四〇六號墓は、「長沙發掘報告」六ページによると、墓道のある長方坑に屬し、長さ四・八メートル、幅三・七五メートル、深さ七・五メートルとなつている。多層の棺槨も保存され、副葬品は同報告書二五ページによると、木俑、竹簡、木矛、漆弓、絲織品、竹篋、席、漆盾殘片などかなり豐富である。おそらく當時の上層階級の人の墓と推定される。そこで四〇六號墓の麻布は、楚の官營工作場で製作されたものであろうと思われる。

地主産　戰國時代の麻織物の主産地は、それ以前と同じく、華北が中心で、華北の麻織物は大麻かいちびが主であつたと思われる。しかし長沙遺蹟からかなり精巧な麻布が出土していることから考えると、南方でもしだいに盛んに生産が行われるようになつていること、また楚の地方の麻織物は、苧麻が主であつたことがわかる。

註

（1）太田英藏「古代中國の機織技術」（「史林」第三四卷、一・二合併號）

（2）楊寬「中國歷代尺度考」九二ページ。

(3) 中原虎男「織物雜考」三三五ページ。
(4) 尙秉和著秋田成明譯「支那歷代風俗事物考」六一ページ。

四　漢代における麻織物生産の發展とその性格

主産地の擴大　漢代に入り、麻織物の生産はさらに發展したようであるが、まず當時の主産地から見てみよう。「史記」貨殖列傳には、

鄒魯……頗有桑麻……
沂泗水以北宜五穀桑麻之畜……
齊魯千畝桑麻……

などと見え、漢代山東地方が麻の栽培に適し、布帛の生産にしたがう人が多かつたことがつたえられている。また「鹽鐵論」本議篇には、

兗豫之漆絲絺紵

と見え、河南地方が紵の特産地であつたことがわかる。山東、河南地方は漢代以前からの麻織物の生産地帶である。

ところで漢代新興の麻織物工業地帶として四川地方があらわれてくる。四川地方は、漢以前から麻織物が生産されていたようで、たとえば「後漢書」南蠻西南夷傳によると、秦代巴の民が「戶出幏布八丈二尺」とされている。しかし四川地方の麻織物生産が本格的に盛んになつてくるのは、漢代に入つてからと思われる。「鹽鐵論」本議篇には、

間者郡國或令民作布絮、吏留難與之爲市、吏之所入、非獨齊陶之縑蜀漢之布也、亦民間之所爲耳、行姦賣乎、農民重苦、女工再稅、未見輸之均也

と見える。この文で注意されることは、蜀漢つまり四川地方が麻織物の特産地として有名になつていること、また特産地

だけでなくその他の地方にも廣く布帛の生産が課せられ、國家の均輸法の對象とされたことである。

四川地方の麻織物生産は、後漢時代に一層の發展を見たようである。「後漢書」公孫述傳に功曹李熊が公孫述に說いたことばとして、

今山東饑饉、人庶相食、兵所屠滅城邑丘墟、蜀地沃野千里、土壤膏腴、果實所生、無穀而飽、女工之業覆衣天下、……

と見える。これは必ずしも麻織物となつていないが、後漢時代の四川地方の織物業の盛んなさまをつたえるものであり、それには當然麻織物も含まれていた、と考えられる。

なお四川地方のほかに南の地方の布の生産も增加したようである。「後漢書」南蠻西南夷列傳に、

秦昭王使白起伐楚略取蠻夷、始置黔中郡、漢興改爲武陵、歲令大人輸布一匹小口二丈、是謂賨布

と見える。一匹は、「說文」によると四丈とされる。一丈は一〇尺であるから、一尺を二三センチとして一丈は二・三メートル、四丈では、九・二メートルとなる。一年に大人一匹、小人二丈というと、一家族の負擔する布はかなりの量になる。これはおそらく武陵地方の布の生産量がかなり高かつたためである、と考えられる。

また「後漢書」皇后紀（明德馬皇后）に「白越三千端」と見え、白越は越布とされる。一端は二丈である。三、〇〇〇端が明德馬皇后のところにあつたといえば、越布の生産量もかなり多かつた、と考えられる。

なお漢代以降四川および江南地方がしだいに麻織物の中心となつたことについては、一つは原料となる苧麻の栽培に適していたことがあげられる。今日苧麻の成長には北緯一五度から四二度迄の地方が最も適し、中國では湖北省附近が最大の產地とされている。もう一つ麻織物の機織にあたつて、あまり乾燥していると糸が切れ易いので、適度の濕度が要求される。四川や江南地方の濕度は、おそらく麻織物の製造に適していたと思われる。

ただし以上の二點については、漢代と今日とで四川や江南地方の自然的な條件に大差なかつたということが前提になるが、これに關しては拙稿「中國古代の漆器工業」[1]においてすでにふれた。

遠距離交易　以上のような主産地の擴大、生産量の增加に伴つて流通も活潑になつたようである。漢代の麻織物の流通で注目されることは、戰國時代に引續いてインターローカルな賣買が行われただけでなく、さらに遠距離交易がおこつた、ということである。

インターローカルな交易については、漢代居延地方で流通した布のうち母蔦布、校布などは、産地が明らかでないが、おそらく前漢中晩期邊郡地方で生産されたものではないか、と推定されている。(2)

遠距離交易についていうと、とくに四川地方産のものが多かつたようである。前にあげた「後漢書」公孫述傳に、四川地方の女工の業が天下をおおつたと見え、四川地方の織物が廣く中國の各地に流通したことがうかがえる。その二三の實例を次に見てみよう。

「居延漢簡」卷三器物類に、

出廣漢八稷布十九匹八寸大半寸直四千三百二十給吏秩百一人

と見える。四川廣漢郡地方産の布が漢代居延地方に流通したことがわかる。ただどのような人たちの手でどのような經路をへて流通したかわからない。八稷布は八升布のことで、あまり上等な品物ではない。

四川地方の布は、遠く國外へも流通したようである。「漢書」張騫傳に、

臣在大夏時、見邛竹杖蜀布、問安得此、大夏國人曰、吾賈人往市之身毒國、身毒國在大夏東南可數千里、其俗土著、與大夏同、而卑濕暑熱、其民乘象以戰、其國臨大水焉、以騫度之、大夏去漢萬二千里居西南、今身毒又居大夏東南數千里有蜀物、此其去蜀不遠矣

と見え、蜀布が遠く大夏（バクトリア）迄流通したこと、その流通の經路は、身毒國（インド）から大夏の商人が買い求めたこと、などがわかる。

生産形態　漢代における麻織物生産の上昇は、どういう生産形態、どういう生産技術を背景におこつたであろうか。

まず生産形態について見ると、基本的には戰國時代と變つていないようである。すなわち農村婦女子の手による副業であつたようで、「一夫不耕、或受之饑、一婦不織、或受之寒」（「漢書」食貨志上引く賈誼のことばに見える）が、當時の流行語であつた。しかしながら特産地では、一部專門の織布業者が發生していたのではないか、と考えられる。これについては、遺憾ながら資料が乏しいのであるが、次のような點から推測される。「史記」貨殖列傳には齊魯地方で桑麻一、〇〇〇畝が有利な投資事業の一つにあげられ、それは一〇〇萬錢の資本の値打があり、毎年二〇萬錢の利益を約するとされる。おそらく麻の特産地ではかなり大規模に栽培する農家があらわれたと思われる。ところでこうした大規模な麻栽培業者によつて生産された麻は、どのようになつたであろうか。それ自身投資事業の一つとされているから、これらの麻栽培業者が直接麻織物業迄經營したとは思われない。私の考えでは、農家や紡糸業者に賣られたのではないかと思われる。當時紡糸業者があらわれたことは、「管子」輕重甲篇に、

桓公憂北郭民之貧、召管子而問曰、北郭者、盡屨縷之甿也、以唐園爲本利、爲此有道乎、……

と見える。「管子」輕重篇は、漢代につくられたとする說が有力である。北部の貧民がささやかな農業經營の旁ら屨つくりや縷つくりを副業としていたという。これら屨や縷の原料である麻は、多く麻栽培業者より買入れたと思われる。またこれらの紡糸業者によつて紡がれた麻糸は、多く專門の織布業者におさめられたのではなかろうか。しかしこうした專門の織布業者は、多くは貧農から轉化した人たちで、ほとんど小規模經營だつたと思われる。

漢代麻織物の盛行によつて最も利益を得たのは、一部特産地帶の麻栽培業者と麻織物の販賣商人である。後者についていうと、「史記」貨殖列傳に一年に帛絮細布一、〇〇〇鈞（一鈞は三〇斤つまり七・六八キログラム）を取扱う商人は、その富千乘の家に比せられることが見えている。帛絮細布を取扱う織物商人のうちかなり大資本のものがあらわれていることがわかるが、かれらの取扱う布は細布であり、高級な麻織物に屬する。これはおそらく都市に居住する專門の織布業者によつて生産されたものであろう。

次に一般的な農家の副業に眼を移すと、漢代麻および麻織物を生産する農家は、地域的にかなり廣く分布していたが、しかしこうした農家に對する國家の貢租は重かつたようである。前漢時代は織物を貢租の對象とすることはなかつたようであるが、しかし武帝時代は均輸法が行われ、四川地方の布だけでなく、廣く民間に布絮をつくらせ、それを安く强制買上した。そこで農民や農村婦女子がその負擔に苦しんだことは、前に引用した「鹽鐵論」本議篇に明らかなところである。

後漢時代は、「後漢書」百官志大司農に錢穀布帛を掌る專職が見える。また實際布調が行われたことは、「後漢書」明帝紀に中元二年租調を赦したことが見え、これはそれ以前租調があつたことを示すものであろう。さらに同書章帝紀元和二年によると、洛陽の民に戸ごとに一匹、同書殤帝紀永元元年によると、兩戸に一匹の布を賜つた、と見えているが、これらの布は、調として徵收したものではないかと思われる。

後漢時代織物を調として徵收することが屢々行われているが、このことは農家の織物生産が增加したことを意味するとともに、農家の餘剩生産が國家の手に吸收されることにより、農家の副收入の增加、農家の經濟的な成長が阻まれた、といえる。さらに極端な場合は、農家を困窮させたこともあつたようである。桓帝の時代河內郡に課せられた絹織物の負擔のため農民の間には流亡するものさえあらわれたといわれているが、麻織物の場合もこれと同樣なことがおこつたと思われる。

結局漢代における麻織物の生産增加は、大商人や國家の收入を增さしめるものであつて、一般農家や都市の織布業者の經濟的な成長を促進させるものではなかつた。また漢代麻織物が廣く流通したのは、多く國家や商人たちを媒介とするものであり、直接生産者はあまり關係することがなかつた。

製造技術　漢代の麻織物の製造技術は、製線工程や紡績工程迄は、從來にくらべあまり變化がないようである。「長沙發掘報告」一〇二ページには、前漢後期の陶製紡輪車がつたえられているが、形や大きさは殷代のと大差がない。またべ

ルグマンは、エチナ河近くの漢代の塞の遺蹟から糸卷竿（distaff）を發見した、とのべて[3]いる。

ただ漢代には、こうした紡錘車のほかに糸車も使用されたようで、山東省滕縣の畫象石には糸車らしきものが見えている。とすると從來の紡錘車よりは紡糸の能率がずつと上つたと思われる。

機織技術は、太田氏の說によると、管大杼機の古式布機が漢代に普及したようである。この古式布機の作業動作數は九で、ちようど原始機の半分である。漢代の布帛の規格は、戰國時代と同樣幅二尺二寸である。この古式布機の作業動作數は九「幅廣二尺七寸」と見えている。これは必ずしも布帛となつていないが、この文のすぐ後に「四丈一匹」と見えているので、布帛も含まれていたと思われる。或は一部に廣巾のものがあらわれたのかも知れない。もし廣巾のものがあらわれたとすると、機織技術の進歩を考えなければならない。

麻織物の種類　漢代の麻織物の種類は、戰國時代と同樣織り方の精粗によつて各種の升布に分けられる。「史記」孝景本紀には七稷布が見え、それは徒隸に着せることになつている。また「漢書」王莽傳には、

〔天鳳三年〕五月、莽下吏祿制度曰、予遭陽九之院百六之會、國用不足、民人騷動、自公卿以下、一月之祿、十稷布二匹、或帛一匹

と見える。これにより十稷布は、官吏の吏祿に代用されるほどであるからかなりの生產量をみたことが考えられるし、王莽當時十稷布二匹の價値が帛一匹に該當したことがわかる。さらにまた「晏子春秋」內篇雜下にも、晏子のことばとして、「十稷之布、一豆之食、足於中免矣」と見える。

このほか居延漢簡には、七稷布、八稷布、九稷布などが見える。

漢代の麻織物の實物については、私が樂浪遺蹟出土のものをしらべた結果を報告しよう。樂浪遺蹟出土の麻織物というのは、四川地方でつくられた漆器の素地に用いられたもので、いわゆる蜀漢の布の實物と思われる。私がしらべたのは、樂浪王盱墓四六號出土の銅覆輪附槃と同じく王盱墓出土の夾紵製耳杯の斷片である。兩者の織り方は、いずれも平織。一

本の糸は、幾本かの纖維から成立つていることが五〇倍の顯微鏡擴大によつてうかがわれる。一本の糸の幅は、大體〇・六センチ强、密度は、一センチについてタテ糸、ヨコ糸とも一五―一六本である。これを升布にあてはめると、一センチ一六本とすると、二尺二寸（五〇・六センチ）では八〇九・六本、八〇本を一升として計算すると、一〇・一二となり、大體一〇升布ということになる。なお使用された麻は、苧麻のようである。

後漢時代に入ると、漆器の素地は夾紵製が多くなつてくるが、これは後漢時代に麻織物の生産が增加してくることとも關係があるように思える。しかも前掲「漢書」王莽傳の記事と併せて考えると、王莽時代から後漢時代にかけて一〇升布がかなり多く生産され、流通したのではないかと思われる。

なおこうした織り方の精粗によつて種類分けがなされると共に、地方によつてそれぞれ獨自の織物がつくられ、そうした織物には地方名その他が冠せられたようである。前に見たように居延漢簡におそらく地方名と思われるのを冠した布が見えるし、また後漢時代四川邊區の哀牢夷によりつくられた闌干細布（「後漢書」西南夷傳）、やはり四川の巴族に屬する氐人によつてつくられた絣（「說文」）、武陵地方でつくられた賨布（「後漢書」西南夷列傳）、越地方でつくられた白越（「後漢書」皇后紀）なども見えている。闌干細布は、「後漢書」によると、「織成文章如綾錦」とされる。また絣は、「說文」では「殊縷布也」と說明されているが、徐中舒はさらに「殊其縷色而相間織之、當卽今條紋布、絣卽謂條文併行之意」とのべている。[4] これらは技術的にもかなり精巧なものだつたようである。

註

（1）「人文研究」第九卷十一號所載。

（2）陳直「兩漢經濟史料論叢」六六ページ。陳氏はほかに冗布をあげているが、これは冗布をさすようである。

（3）前掲 G. Montell の論文に見えている。

（4）徐中舒「巴蜀文化初論」（「四川大學學報」社會科學一九五九年二號）。

五　むすび

以上中國古代の麻織物生産について私見をのべてきたが、要約すると次の通りである。

(1)中國の麻織物の起源は、新石器時代迄溯ることができるが、當時の詳しい情況は不明である。殷から周にかけての麻織物生産は、大體自給自足であるが、周末いくらか餘剰生産が發生し、物々交換の形で取引されることもあつた。殷周時代は王室の隷屬民の生産と、村落共同體の生産とが行われた。技術的にはまだ低い段階にあり、今日その痕迹が殘つている殷代の精巧な麻織物は、王室の隷屬民の多くの勞力と長い時間をかけてつくられたもので、農家の婦女子によつてつくられたものは、遙かに低級で粗末なものであつた。

(2)戰國時代にはかなりの餘剰生産が發生し、一部は貢租として國家におさめられたが、他は商品として市場に流通し、貨幣經濟の浸透した地方の農民は、現金をもつて麻織物を購入した。戰國時代に多くの餘剰生産が發生したのは、おもに生産形態の變化によるもので、村落共同體が或る程度分解し、麻織物生産は共同作業にかわつて個々の農家で行われるようになつたこととくに一部富裕農家では、勞働力に餘裕が生じたことによるものであろう。技術的には織布技術の面で多少の進歩が見られる。なお商品生産の發生に伴つて麻織物の規格ができ上り、また織り方の密度によるいくつかの種類があらわれた。

(3)漢代とりわけ後漢時代麻織物生産は一層發展したようで、主産地は山東、河南地方からさらに四川や江南地方へ擴大し、また流通範圍も局地的な賣買だけでなく、遠距離交易もあらわれた。こうした生産の發展は、農家の副業生産の上昇ということのほか都市に專門的な紡糸業者や織布業者が發生したことによる。ただし專門の紡糸業者や織布業者は、貧農から轉化した零細業者が多く、かれらによつて製造された上布は、むしろ織物商人に利益をもたらした。また農村の生産も國家の貢租として徵收されることが多く、農家自體の收入をことさら增加させるということにはならなかつた。結局漢

代麻織物生産の上昇によつて大きな利益を得たのは、大資本の麻栽培業者や織物商人と國家であつた。なお漢代には紡糸や機織の技術に發達が見られることも、生産の上昇に影響したと思われる。當時の麻織物の種類としては、とくに一〇升布の生産が増したようで、このほか密度による種類だけでなく、地方の獨自の技術による織物がかなりあらわれるようになつた。

（附記）　本稿執筆後「左傳」襄公二十八年に引かれた晏子のことばに、「且夫富如布帛之有幅焉、爲之制度、使無遷也」と見えているのを知つた。これも齊のつたえであり、本文でのべているように齊ではかなり古くから布帛の規格が一定していたようである。